

## 通所施設における知的障害成人の行動障害と課題遂行に及ぼす

## 支援マニュアルの効果（2）

— 職員の支援行動の実行を中心に —

○村中 智彦

久保田 雅貴

（上越教育大学臨床・健康教育学系）

（長野県松本ろう学校）

Key Words: 行動障害、支援マニュアル、知的障害

【目的】本稿では、先の(1)で報告した参加者の行動障害と課題遂行の望ましい変容について、支援マニュアルの活用による職員の支援行動の実行との関連性を検討した。参加者、倫理的配慮、期間・場所・研究者の役割、自立課題、担当職員、行動障害のFA、手続きは報告(1)と同じであった。

【支援マニュアルの手続き】P1 と P2 の行動障害の機能的アセスメントと競合行動バイパスモデルにもとづく介入方略より、支援マニュアルに記載した手続きは、P1 で作業開始前に声をかける、職員がチラシを 5 枚（1 セット）数えて手渡す（以下、5 枚手渡す）、1 セット終わったら職員に報告するよう声をかける（報告を促す）、1 セット終わったら称賛する（称賛する）、記録用紙に記入するであった。P2 では、作業開始前に声をかけて誘導する、選択ボードを提示し 6 課題の中から選択させる（選択ボードを提示する）、終わったら称賛する（称賛する）、6 課題終わったら 5 分間休憩する（休憩を促す）、記録用紙に記入するであった。【職員の支援行動の評価】介入期とフォローアップ期における自立課題での担当職員の P1、P2 への支援行動を標的とし、支援マニュアルに記載された職員の支援の実行レベル（レベル 1、0）を評価した。レベル 1 を支援マニュアル通り又は類似した支援を実行した、レベル 0 を実行しなかったと設定した。また、BL 期と介入期での参加者への働きかけ、支援内容を課題への促し、称賛、身体制止、その他で評価した。担当職員が設置した支援マニュアルを参照した（見た）時間を計測し評価した。

【結果及び考察】Fig.1 に、P1 に対する職員の支援行動「5 枚手渡す」「報告を促す」、Fig.2 に、P2 に対する職員の支援行動「選択ボードを提示する」「称賛する」の実行レベルを示した。P1 に対する「5 枚手渡す」のレベルは、介入、フォローアップ期ともに、全日程で全ての職員がレベル 1 であった。「記録用紙に記入する」でも認められた。それに対して、「報告を促す」では日によって異なり、レベル 1、0 の変動が認められ、「声をかける」「称賛する」でも認められた。P2 に対する「選択ボードを提示する」のレベルは、全日程で全ての職員がレベル 1 で、「休憩を促す」「記録用紙に記入する」でも認められた。「声をかけて誘導する」「称賛する」は日によって異なり、レベル 1、0 の変動が認められた。P1 に対する職員の支援内容では、介入期で 4 名中 2 名の職員で課題遂行への促しと称賛が増加した。P2 では 1 名で課題への促しと称賛が僅かに増加した。職員が自立課題の作業時間中に P2 を外の散歩に連れて行くなどの課題遂行とは関係のない支援が減少した。Fig.3 より、P1 の職員の支援マニュアルへの参照時間は 1 回目 22～50 秒であったが、2 回目以降、減少した。同様に P2 の職員の参照時間も 1 回目で 4～78 秒であったが、2 回目で減少した。P1 の担当職員の実行レベルの高かった「5 枚手渡す」「記録用紙に記入する」は、それを実行することで P1

が課題遂行をしてくれたものであった。担当職員は、P1 が課題遂行をするという望ましい変容が認められた支援行動を実行する傾向があり、P2 でも同様に認められた。職員の支援行動は、参加者の望ましい変容によって正の強化を受けていたと考えられる。支援マニュアルの参照時間は、2 回目以降減少したことから、職員が支援内容を理解することでそれを参照する必要性は低下すると考えられる。

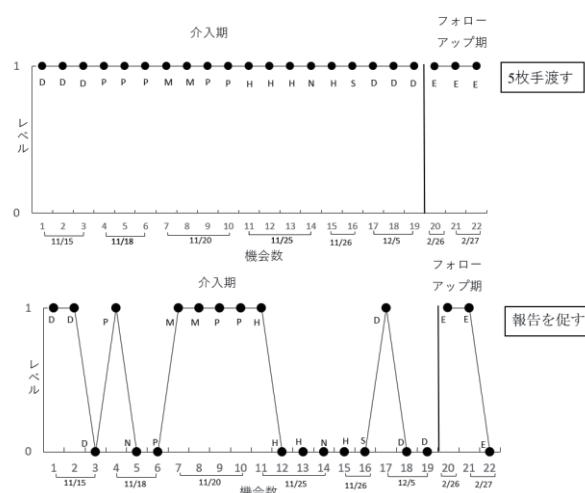


Fig. 1 P1に対する職員の支援の実行レベル

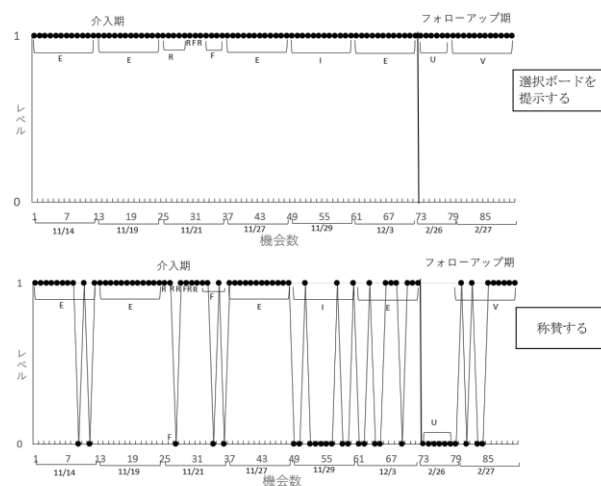


Fig. 2 P2に対する職員の支援の実行レベル

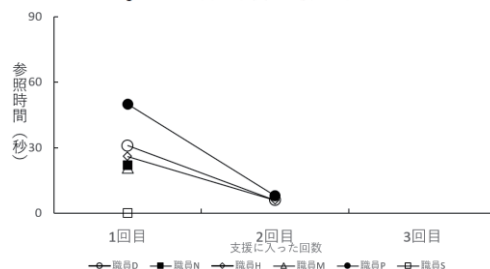


Fig. 3 P1の職員の参照時間

(MURANAKA Tomohiko, KUBOTA Masaki)